
冒険の準備はいいか？

上条信者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険の準備はいいか？

【Nコード】

N9526Y

【作者名】

上条信者

【あらすじ】

冒険者の成り立つ世界で、俺達は冒険者を目指す。

魔法も、剣も、悲劇も、友情も、冒険もあるファンタジー。

さあ、冒険の準備はいいか？

ファンタジーもの。テンプレートな基礎を守りながらも型破ったギヤグを修行したいという習作。

長い目で見守って欲しいなあ。

今までの連載の反省で、短くしながらできるだけ早くをモットーに、話は考えつつ。

第一話前編 「え、冒険者って登録しないといけないの？」（前書き）

よろしくおねがいしまー

第一話前編 「え、冒険者って登録しないといけないの？」

冒険者。

それが成り立つ世界。

様々なモンスターが蔓延り、未開の地や古代の文明、金銀財宝に数々の伝説。

それらに立ち向かい、打倒し、乗り越えて、己の命を賭け挑み続ける者。

名もなき戦場で、名もなき誰かが、名もなき骸として果てようとも、彼らが止まることは無いだろう。

覚悟が、意地が、度胸が、恐怖が、ただその脚を前へと進める。

弱者は生き残れない、強者のみがその頂へと辿り着ける。

さあ、冒険の準備はいいか？

第一話前編・「え、冒険者って登録しないといけないの？」

「やべえー金もうねーわ」

ボロい麻袋を漁ると、中身が殆ど空であることに気付いた。

「しゃーね、どっか適当なところで依頼貰うべ」

背伸びしながらそういうと、なけなしの金で買った布に包んだ安っぽい剣を手につ。

紐も鞘も付いてない中古品だが、貧乏人は贅沢言ってはいけけないだ。

一々手が片方塞がるのはめんどくさいが、武器は高い、とにかく高い。

収入の内食費と薬代の割合が異常に高い家では手が出ない程に。

「ま、いつか」

生来の重要なこと以外は軽く流してしまうこの性格のお蔭で、今までの極貧生活乗り越えてきたとも言える。

常に野宿、街なのに野宿。飯はパンと水が一食。風呂？何それおいしいの？

未だ眠りに着く我が愛しの妹、この裏通りの仲間の間では大切に扱われているお姫様をやさしく起こさないように撫でると、俺はしばらく洗濯してない一張羅を着込んで仕事を貰いに行くのだった。

依頼は見つかった。

アシパレットに被害を受けてる農家が居たので、必死こいてお願いしたらオーケーしてくれた。

アシパレットっていうのは角生えた馬っぽいモンスターで、この時期になると子供産む為に作物とかを求めて近隣の畑に現れたりする。一般の人々には手に負えない程度には強い。

冒険者からしてみると雑魚だけ。

冒険者はその名の通り、財宝求め報酬求め、命を賭ける代わりにそれなりに実りの良い収入を得られる職業の事だ。別名命の捨て場。実りはいいが危険であることには変わりなく、もちろん冒険者になる為にはそれなりの強さがなければならない、らしい。

らしい、というのは俺がこの街に着たばかりの田舎者だからだ。村から妹と都会に出てきてみたはいいものの、さっぱり右も左も解らない。

妹はそのカリスマ性からか裏通り一体からは可愛がられてるので貞操とか奴隷屋の心配いらない物の、食事や金、身体の薬と為ると話

は別だ。流石にこれは俺が面倒みなければならない。

しかし対して学があるわけでもなく、頭もよろしくない俺が持つて生れて出来る事と言えば身体と命くらいのもんだった。

というわけで、冒険者としていろいろ仕事を重ねつつ、現在もお仕事だったのです。

「俺ピーンチ」

現実逃避から立ち直って、もう一度今の状況を整理する。

アシパレットがいる。多分依頼の奴だろう。

だけどおかしい、数が。

依頼で聴いた時の目撃情報は一頭だけだったはずなのに、今は二頭もいる。

これはまあいい。追加料金にちょっと色付けて貰えるかもしれないから。

問題は手元だ。

「・・・・・・・・」

俺の手元には無残に中ごろから木っ端みじんに折れた剣。

一頭目を相手している時に二頭目が背後から襲いかかって来たので、慌てて防いだら見事に折れやがった、ファック。

俺の武器はこれだけだ。

後は春だとはいえまだ寒いんじゃないかとよく言われる薄着のしばらく洗ってない一張羅、つか普通の服。

・・・どう考えても詰んでる。
俺の實力はがんばってアシパレットを一匹ギリギリ狩れる程度だ、
命がけで。

「フシュー！フシュー！」

「ブルルルル・・・！」

二頭とも殺る気満々なため逃げる事は不可能。
ここらへんは依頼で何度も足を運んだ山だとは言え、人間とモンスターでは根本的に地力が違いすぎる。

どうするか頭を悩ませていると、二頭の内一頭が突進してきた。

「うおおおおお！！？」

全力で横に転がり避ける。
が、追撃にもう一頭迫って来た。
立ちあがってもいない状態では避ける事が出来ない。

「あ、これ死んだな」

体重はゆうに三百キロはあるだろうか、俺を押し潰さんとして振り上げられた前足を、俺は呆然と見詰めた。

まだ、死ねないのに。

あいつに、復讐できていないのに。
妹も、^{シルカ}帰りを待っているのに。

そんなことが頭に過った時だった。

「ファイアアロー！」

一筋の光がアシパレットの首を吹き飛ばした。

第一話前編 「え、冒険者って登録しないといけないの？」（後書き）

こんくらいの長さで続けばいいな

第一話前編 その2

続けて後ろからも破裂音。

振り返ってみると、見事頭の半分程がこんがり焼けてるアシパレット。

なんか知らんが依頼達成。

やった、ついでに晩御飯もゲットだ。

早速解体する為に縄になりそうなものを探す。

肉肉、久しぶりの肉。

ナイフは・・・折れてるけど剣でいいか。

「ちょっと、あんた」

「？」

いそいそと気にアシパレットを吊るしあげていると、声が聞こえた。もしかすると、あの謎の爆発の正体だろうか。

世の中には魔法という力が存在する。

マナを己という器に溜めこみ魔力とし、呪文や祝詞で魔法を使う、らしい。

らしい、というのは俺が田舎者だからだ。

魔法使いなんて便利屋俺達の村にはいなかった。

だから見たこともないおっかない奴らだと思っていた、だってアシパの首吹き飛ばしたし。

そんな魔法使いが俺に話しかけたとしたら・・・恐すぎる。
だが逃げるわけにもいかない、だって命の恩人だし。

ここはどう対応すべきだろうか？

・・・とりあえず、舐められたら終わりだな。

「せつかく助けてあげたのにお礼とかそういうの、ないわけ？」

「うるせーばかやろー！今晚飯の解体中だ！貴重なたんぱく質だぞ！貧乏人舐めんなよ、あとありがとうございました！」

ウガー、と振り返りながら両手を威嚇するように広げてそういうと、ちよつと困惑した顔をする女の人。

金髪緑眼、ツリ目でクールとかビューティーとか似合いそうな整った顔に、杖やローブを纏った俺の魔法使い像を裏切らぬ恰好の美少女がそこにいました。

家の妹の方が可愛いけどねっ！

「え、ええ、そうね。貧乏だと大変ね。後、こちら辺アシパレットの群れが出るって依頼を受けたから来たんだけど、あんたはなんで来たの？」

「お金稼ぐ為にここの畑の農夫にお願いした」

「・・・つまりお手伝いって事？」

「ばっ、ちげーよ！依頼だよ依頼！俺冒険者だし！」

「冒険者？あんたが？」

「あ！？なんか文句あんのかよペチャパイ！」

「・・・ファイアアロー」

「・・・た、助けてくれてありがとな。俺、クインス、ただのク
インス」

「あたしはパネリア・ローシエ。パネリアでいいわ」

あの後こんがり逝きかけた俺は、なんとかほうほうの身でなんとか帰還した。

アシパレットの肉はパネリアさんの^{ファイアシャワー}火矢乱射によって焼失したため諦めた。

農夫の家で報酬だけは受け取り、帰ろうとすると、アシパレットによって死にかけた疲労で途中で気絶。

気付けばパネリアさんに拾って貰って街に還って来ていたのだった。……パネリアさん、申し訳ないっす。ペチャとか言ってますい
ませんでした。

「で、あんたがあそこに居た理由だけど」

「俺はちゃんと働いたぞ」

「それはわかってるわよ、なんせ冒険者でもないのにモンスターに挑んでたんだし」

「は？」

何言ってるのこの子？とそんな顔でパネリアさんを見ると、その冷たいツリ目をさらにきつくして呪文を唱え始めたので慌てて止める。

「ちょ、ここ店の中だぞ!？」

「解ってるわよ、だからその不快な視線をやめなさい」

「うつす！」

「はあ・・・、じゃあもつかい聞くけど、なんであんたは冒険者でもないのにあんなことしてたの？」

「え、自分では冒険者のつもりだったんですけど」

「はあ・・・もしかして田舎から出てきたの？」

「一か月前にこの街に来ました、武器は中古の拾った剣だったけど折れたので素手、クインスです」

「・・・言つとくけど、アシパレットも冒険者にとっては雑魚よ、ランクして最低のEよ」

「なん・・・だと・・・!あんなに強いのか!？」

「冒険者登録するとね、魔力に目覚めたり気力を使えるようになるのよ。いわば通過儀礼を通った者に対するギフトね」

「へー」

てことは、冒険者登録すれば普通誰でも強くなる訳か。
・・・そっぴやしてねえな、登録。

マジかよ、冒険者って登録しないとなれないんだ。

「あれ、ならなんでみんな冒険者にならないんだ？みんな強いなら安心じゃん」

「あー・・・あれよ、冒険者になる前に通過儀礼があるって言ったでしょ？あれが物凄く痛いんだよ」

「え、どんくらい？」

「屈強な成人男子でも人によっては死ぬわね」

「何それ怖い」

第一話前編 その2（後書き）

ラグナロクとかモンハンとかファイファンとかドラクエとかを混ぜ
っ返していきます。

第一話前編 その3

「ま、まだ理由はあるんだけどね」

「え、まだあんの」

「冒険者になったらギルドに入らないといけないの。ギルドに入ってた方が色々都合がいいし、面倒もみてくれるからね。他にも力の悪用を防ぐ為つてもあるけど。」

「だけど、ギルドに入ったらある程度の義務や貢献を果たさないと除名されたり懲罰を受けるわ。私みたいに魔法使いってだけで乗り切れる人も入れけど、そこまで行くと魔導師^{ウィザード}レベルだから私にはまだ無理ね。要は、ギルドの犬になりなさいって事。おわかりかしら？」

「・・・なるほどな、やべえ仕事ってことか」

「そうよ、見たでしょ？魔法じゃなくても一般人には手に負えないアシパレットを雑魚扱いなのよ？力を無節操に与えたらそれこそギルドや冒険者の意味がなくなっちゃうもの。これが首輪としての理由ね」

「因みにお金とかかかる？言っちゃなんですけど俺その日暮しなんで妹も居るし」

「お金はいらないわ。確実に冒険者になりたいなら専門の養成施設もあるけど、こっちは有料ね。」

「ただ、冒険者になるには対価がいる。己の命を、人生を、全てを賭ける事になるわ。出来るなら慎重な方を選ぶ方が得策よ」

「……………」

「パネリアさんにそう言われて、今まで言われたことをもう一度考えてみる。」

「命を賭けるに値するか、自分の目的は果たせるのか、妹は守れるのか。」

「そんなもん、とっくだ。」

「俺を冒険者にしてくれ」

「……………あなた正気？妹さんがいるんでしょう？そんなに家族を無駄に悲しませたいのかしら」

「あいつとはな、一個約束してんだ」

グイツと貰った酒を飲み干し、机にジョッキを叩きつけて言った。

「もし、やりたいことが見つかったら、迷うなって」

「……………呆れた。解ったわよ、連れて行ってあげる」

「あ、そうだ。後学の為に聞いときたいんだけどさ」

「何よ？」

「登録する時ってどんくらい痛かった？」

「んがつ！？そ、そんなことどうでもいいでしょ！？」

クールなビューティーパネリアさんが初めて大きく動揺した。

実は結構確信犯で質問したのだが、これは何かあるとみて間違いなさそうだ。

さらにニヤニヤしながら質問する。

「いやいや、先輩のお話俺聞きたいです！」

「~~~~~っ！わかったわよ、…………んこ…しそつに…………るくらい」

「え、何？」

「うんこ漏らしそつになるくらいつつたのよ！馬鹿死ね！！」

「そいつは痛そうだwwww」

「ほら、あれが冒険者ギルドよ」

「おーでけー」

「あんた一カ月この街に住んでるんじゃないの？」

「普段は裏通りで暮らしてるからあんまこっちにや来ないんだよなあ」

酒場を後にし、俺の冒険者登録を済ませる為に冒険者ギルドへと訪れていた。

どうしたらいいのかよくわからないと正直に言っていると、溜息つきながらも手続きをするまで座つてると開札へと向かうパネリアさんに惚れそうになる。

い、いや、俺にはシルカという大事な妹が……！

……妹はダメだな、うん。

暇なので、若干眉が寄った顔で開札のお姉さんと話しこんでるパネ

リアさんを眺めてみる。

整った顔立ちは、俺以外でもこのギルド内に存在する男たちの視線を集めているようだった。

美人で、俺を助けてくれて、その上面倒見もよくてクールビューティー、……完璧だな。

そんなことを考えていると、パネリアさんがこちらに来るよう手招きしてきたので、それに従って飲みかけの酒を置いて開札に向かう。

「どうしたん？」

「ちょっと問題発生ね」

「え、どういうこと？」

「それは私から説明させて貰うわ」

開札のお姉さんが営業スマイルで微笑みながらそう言う。
うん、美人だな。話くらい黙って聞くか。

「実はね、自由登録制度が廃止になったの」

「あ！？てめえどういうことだ！！皆登録できんじゃねーのかよ！
？事と次第によっちゃ犯すぞてめえ！！！」

「ちょっと落ち着きなさい」

「これが落ち着いてられるか・・・！」

「・・・ファイア——」

「人の話は最後まで聞くって常識だよな」

カウンター乗り越えそうな体勢を一瞬にして直立不動に戻す。

「それじゃ、説明するわよ。確かに人魔戦争時代は軍以外でも自由に動けるギルドが絶対数必要だったから、素人だろうと誰だろうと登録を認めてたけど、その戦争も終わってもう三十年経つわ。だからそのギルドも無駄に一般人を雇わなくてもよくなったわけ」

「なん・・・だと・・・」

「だから、前からあった冒険者養成施設である程度の訓練を受けた人達だけ登録を認めるようになったって事」

俺の冒険は始まる前から終わってしまったようです。

第一話前編 その3（後書き）

ちゅーちゅする？

第一話前編 その4

「どうしょ・・・俺金持ってねーぞ・・・」

「大丈夫、あなたたちみたいな人達が減った訳ではないって事は解ってるから、施設には入って貰うけど、あなた達用の学費免除の為の制度も整ってるから」

「どうやら首皮一枚で冒険者への道は繋がったらしい。
よかった、マジで。」

「それじゃ名前と住所教えて、取りあえず向こうに連絡しておくから」

「クインス、裏通りで野宿」

「・・・・・・・・・・・・・・・・いろいろ苦労してたのね」

「同情はいらねえからとつと済ませろよ」

「んじゃ、私は行くわね」

用は済んだのだとばかりにその場を颯爽と立ち去ろうとするパネリアさん。

だが俺は言いたいことがあったのですぐさま呼びとめた。

「あ、ちょっと待って」

「え？」

振り返ったパネリアさんに深々と頭を下げると、一言、こう言った。

「お世話になりました！」

「……嫌いじゃないわよ、そういの。じゃあまたね、後輩さん？」

「うっす！」

そういつて今度こそパネリアさんはギルドから出て行った、パネリアさんマジかけー。

「いつか俺もあんな冒険者になるわ」

「彼女まだ養成施設出てないわよ？」

「えっ？」

「シルカ！」

「あ、おかえりなさい兄さん」

「俺冒険者になってくるわ！ついでにお前も来るか！？」

「うん、解った」

「よし、じゃあ早速ギルドへ向かうぞ！」

すっかり忘れていたこと、養成施設に入っている間妹はどうするの

か。

稼ぎは学費でとられるだろうし、彼女も病気だ、一人にはできない。なので結論。置いてけないなら連れてくればいいじゃない。

聞けば飯も寝床もある寮を紹介してくれるらしい。なら、こんなあばら家にいるよりはるかにマシだろう。

了承も貰えたし、問題になりそうなことは思い付かない。

というわけでシル力を背負って再び裏通りを後にしようとした時だった。

「姫さん抱えて何処行く気だ坊主」

「レンヤじいかつ！」

「姫さんはこの裏通りの希望だ。そんな姫さんに無理させる気か？」

「カカツのおやじ……」

見れば、裏通りの仲間たちが勢ぞろいして通路を塞いでいた。

皆一様に腕を組み、厳しい表情で俺を睨みつけている。

妹はこの裏通りでは正にお姫様のように扱われている。

美人なのもあるが、なんといっても全てを包み込んでくれるような

その頬笑みとカリスマ性。

邪なものがない純粹な生きる笑顔。

辛さと闇を乗り越えた者ができる、深い情愛の籠った目。

天真爛漫な柔らかい物腰。

家のパーフェクト妹は、そんな少女だ。

カカツツのおやじは希望と言った。

確かに、俺が彼女を失ったら、言っちゃ陳腐だが絶望するほかないだろう。

だが、それでも譲るわけにはいかない。

おやじ達のことを信じていない訳ではないが、シルカは俺の妹なのだから。

「皆、落ち着いて」

シルカがそう言うと、皆の緊張が若干解れた気がする。

「私は、兄さんと一緒に生きていけない。けど、みんなが私を必要としている。だからこうしましょう？私が大好きなみんなと私が大好きな兄さんが納得いくようにお別れ会をしましょうか」

「宴って事？」

誰かの手が拳がってそうシルカに聞いた。

シルカはただ微笑んで一言、そう、と答えた。

「・・・ま、クインスのバカならともかく、シルカちゃんの頼みなら仕方ねえ」

「そつだの、おい坊主！シルカちゃんを泣かせたら承知しねえぞ！」

「お、おう」

なんか妙な方向に流れて行ってるな。宴なら俺も賛成だけど。いやはや、家の妹すげえな。

うーん、明日また来いって言われたから、シルカの登録は明日でもいいか。
そう思いながら皆が自分の家からテーブルや椅子を出すのを手伝っていく。

その日の裏通りの夜は、寂れた雰囲気を感じたように陽気な喝采が上がっていたのであった。

第一話後編 「なんだと、俺の付ける職業が・・・」 (前書き)

実はこの一話しか考えていないという事実。

第一話後編 「なんだと、俺の付ける職業が・・・」

「まず職業の適性から見て行くわよ」

「うっす」

「はい」

そして翌日。

妹も編入したい旨を伝えると快く了解してくれたので、今もこうやって無事にシルカと一緒に係員の人の指示に従って手続きを済ませて行く。

しかしこのお姉さん、昨日は眼鏡かけてなかったのになんで今日はかけてるんだろ？しかもなんかノリノリだし。

「基本の職業は剣士^{ソードマン}、魔法使い^{ソーサラー}、修道士^{アコライト}、盗賊^{シーフ}、弓兵^{アーチャー}の五つよ。全員はまずこの内のどれかになって貰うわ、冒険者なのに技能がないなんて死に行くようなものよ」

「なるほどなあ、じゃあ俺は剣士かな。剣ずっと使ってたし」

「ところがそうとも限らないのよね。職業の適性ってその人の魂の方向で決まるから、要は性格の問題ね」

「どういつことだってばよ?」

「例えば剣士^{ソードマン}になる人は、勇敢で威勢がいい人が多いわね」

「俺の事？」

「確かにあなたは無駄に初対面の人に態度でかいけどね……」

「あの……」

黙っていたシル力が控えめに手を上げる。トイレかなんかだろうか？

「私、身体が弱いんですけど、そんな人でもできる職業ってあるんですか？」

「ええ、今言ったのは基本だけで、そのほかにも適性に合った様々な職業があるわ」

「それはよかったです」

ホッとした様子で胸を撫で下ろすシル力に、俺も頭を撫でながらよかったな、と声をかけた。

「じゃあ、適正測るわよ」

「どうやって測んの？」

「こっやってよ」

「いたっ!？」

「きゃっ!？」

いきなりお姉さんにプスツと針を刺された。

「なにしゃがんだ!!」

「悪かったわよ。でもほら、これで適正出たわ」

差し出されたものをマジマジと見ると、血の付着した紙がだんだんと変色して言っているのが解った。

どうやら特殊な紙に血を付けるとそれで適性が分かるらしい。

誰だ、こんな仕組みを作ったのは。俺の妹の玉のような肌を傷つけやがって。

「妹さんの適性は、魔法使い^{ソーサラー}ね。おめでとう、あなた凄い素質を持つてるわ」

「本当ですか!ありがとうございます!」

「で、お兄さんの方なんだけど……」

「ワクワク!」

無駄にワクワクとした期待を身体で表現しながら結果を待ちわびると、お姉さんは困ったとも言っような顔で俺を見てこう言った。

「……無能力者」

「は？」

「所謂無職ね」

「うそだろオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

！？」

シャウトした、全力で、力の限りを尽くして。

「たまに居るのよね、何にも適性がない人って。でも、まあ……一般人よりは強くなってるはずだし……。頑張ってる……。」

「ふあつくふあ ああああああああああ あああ あつく!!!」

「あ、あの、兄はその、ダメな人間ではありませんけど、心底ダメな人ではないと思うんです！」

「ありがとうな、シルカ。でもな、今のお前の優しさは痛いよ、クリティカルで」

そんな世界に絶望した今日のこの頃。

「じゃあ、寮に連絡しておいたから、この手紙を渡せば入れて貰えるはずよ」

「色々ありがとうございます。ほら、兄さんもいつまでも泣いてないで」

「ちくしょう……こんな世界滅んじまえばいいんだ……！」

「まあまあ……。そういえば、あちらでは色々とご都合させて貰えると聞いたんですけど」

「ええ、向こうじゃその適性職業に合わせた道具を支給して貰えるわ。もちろん投資だから利子を付けて将来返してもらうことになるけどね。それと、基本的な生活に必要なものも支給して貰えるわよ、食事とか日用品とかね。これも将来への投資よ?」

「魔法使いは何を貰えるんでしょうか？」

「そうね、媒介用の杖とか魔導書とか色々ね。魔法に関わる人は学ぶことが多いから施設の卒業も他より若干遅くなるのよね。ついでに」と彼は……」

「ええつと……」

「無能力者だから何もないかもしれないわね」

[illegible]

俺の悲鳴と絶叫が響き渡る。

迷惑かかるとかそういうのはもう考えてない。

つか生きる事を迷惑視されることになった無能力者に今さらプライドとかそんなない。

「じゃあ、がんばってねお二人さん」

「はい、ありがとうございます」

「見とけよ！ぜってー冒険者になってやるからな！乗れ、シルカ！」

「はいはい」

そうして俺はシルカを乗せて、まだ見ぬ冒険者養成施設へと向かった。
たのであった。

第一話後編 その2

「ぜえ・・・ぜえ・・・！おい、シルカ・・・なんかお前重くな
つてね！？」

「む、まだ三十キロ台ですよーだ」

「馬鹿野郎おおおおお！！おまつ、ちゃんと食べつたろう
が！！」

「どっちですかー」

「どっちでもキツイ！もう何キロくらい走ってんだ！？」

「まだ十キロくらいです。でもすごいですね兄さん、私を背負った
ままこの距離を三十分弱で走りきるなんて」

「毎日命がけだったからな！！」

「ふふ、ありがとう、兄さん。私は兄さんの妹で幸せです」

「おっしやあ！お兄ちゃんエネルギー供給完了だぜヒーハー！！」

ギアを切り替え加速して走る、テンションが上がってアドレナリン
がヒーハー！！

この通り、中々冒険者養成施設は見えてこない。

なんでも脱走などを防ぐために軽く郊外あたりあるらしいので、街
の中心にあつたギルドから必死に妹を背負って爆走中なのだ。

持ちこむ様な荷物は無い。コップとかの日用品も向こうで新しい奴貰えるだろうし、食料も昨日の宴で使いきっちゃったから今日はまだご飯食ってない。

しかしお兄ちゃんエネルギーは全てのお兄ちゃんにとって絶大なエネルギーだ、例え空腹であろうとも十キロの距離を一人抱えて走ってもまだ動ける程に！！

正直めっちゃ疲れてきたし、鍛えた人ならそうでもないかなとは思うけど、そんなこと気にしてたら脚が止まる。止まったら時間のロス。時間は有限、もつたいない。

これ貧乏人の悲しき性。^{さが}

「あ、見えてきました。あれじゃないですか」

「お！マジか！」

マイシスターから目標の発見を告げられ純粋にテンションの上がる俺。

おお、あれか、でけえな。

裏山がありそうなくらい山に隣接して造られた施設を見て、到着までもう一苦労しそうだと思息をつく。

「頑張ってください、兄さん」

「おっしやああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

「や、やっと、ついた……」

「お疲れ様です」

やっとのことで養成施設に辿り着いた頃には日は高く昇っていて、
燦々と照りつく日差しは俺から汗を更に出させていた。
あぢく、水くれ水。

門の前で座り込んでしまいが許してほしい、十キロ行軍に加えて山登りだ。馬がないとキツいところを歩くことなく走って来たのだ。心臓も爆発しそうだぜ。

まあ、やつとのことではいたのだ、ぐだぐだ言っても仕方ない。

大きく深呼吸を繰り返しながら何とか立ちあがると、同時に扉が開いた。

「あ」

「あ」

目の前のデカイ門じゃなくて脇の門番用の扉から出てきたことに加え、出てきた人物が知り合いであることにも驚いた。

「パネリアさんじゃん」

「あんただったのね、学長が言ってた編入者って。そっち妹さん？」

「あ、初めましてシル力です。えっと・・・」

「私はパネリア・ローシェよ、よろしく」

「はい、パネリアさん」

「パネリアで構わないわよ」

仲良く握手なパネリアさんとシルカに、置いてけぼり俺。
くっ、ならば百合百合な想像で我慢してやるぜ！

「そこ、変なこと考えてないでしょうね」

「百合百合っていいよね」

「兄さん、失礼ですよ。私は可愛い物好きなんです、百合じゃないです」

「ああ、確かに兄妹ね」

呆れたようにそういうパネリアさんだった。

「にしてもパネリアさんがまだ実習中って本当だったんだ」

「そうよ、キャシーさんから聞いたの？」

「受付姐さんから聞いた」

「だからその人がキャシーさんののよ」

「へーそうなんだ」

「兄さん、人の名前はちゃんと覚えないと」

俺、人の名前覚えんの、苦手。

「さて、なら付いてきなさい。学長室まで案内するわ」

「はい」

「わかりました」

学長ってどんな人なんだろう？女の人がいいな、美人の。
この後俺は心底この想像を後悔することになる。心底な。

第一話後編 その3

「学長、連れてきましたよ」

「入っていいわよ」

入っていいとのこと、俺は取りあえず裏通り流のドアの開き方で入室させて貰う。

「入るぜ」

ドゴォ！

ノリでドアを蹴ってみたら金具を粉碎して吹き飛んで行った。
・・・やべーマジか。
不味い、このままでは空気が微妙になること請け合いだ！何とかしなくちゃ！

「パネリアさん！俺を^{ファイアアロー}火矢で吹き飛ばしてくれ！」

「はあ！？てかなんでドア蹴り破ってんのよ！？」

「今いい！早くっ！..！」

「嫌よ、めんどくさい」

「ええい！ならシルカ、俺を殴りとばせ！！」

「ええ！？ええつと、その・・・殴ればいいのか？」

「そつだ！カモンツ！」

「えゝ・・・えいつ！」

「おえあつつつ！！？」

鳩尾に繰り出されたシルカのボディブローは嗚咽させるほどの見事な威力を持って俺を部屋の中に叩き込んだ。痛いとかそういうレベルじゃない、死にたい。

我が妹の第二のスキル、怪力。この天より授かった本人には不評な謎の怪力の威力は、裏通りに来て間もないころ、彼女を襲おうとしてボッコにされた奴等がたくさんいる事から裏通り一同より太鼓判だ。

「ナイスブローだ・・・我が妹・・・よ・・・（ガクッ）」

「何なんのよ一体」

「どうも、私シルカと言います。先程ドアを蹴破って今はそこで伸びている兄のクインスの妹です」

「そう」

「因みにドアはノリで蹴破った！（ムクッ！）」

「そういうことは聞いてないわよ」

ブラウンの髪に青い瞳をした美女がこちらを眺めておりました。
後眼鏡かけてる！

どうだこの俺の見事な人物特徴は！なんつーかあれだな、パネリア
さんをそのまんま大人な人にした感じ。ビックールビューティー
とかそんなの。

そんなお方が机に座って呆れた表情です。そろもっ、背筋から何か
ヤバい衝動が沸き上がって来ますよ。こっ、ゾクゾクって。

「因みにそのドア弁償してね」

「え、やだよ、俺金持ってないもん」

「一般常識で考えてこのドアを壊したあなたが弁償するのよ」

学長さんも魔法使いっぽい職業なのか、どこからともなくスラリと
身の丈以上にデカイ杖を取り出した。

この人もふざけちゃうと実力行使のツッコミする人か、たまには優
しい人はいないのかよ。

「それでも結構我慢してるんだけど」

「じめんなさいであります!」

キュイイイイイン……と何かヤバそうなものが収束し始めたので即座に頭を下げた。謝った。

「はぁ……。で、あなたがキャシーが言ってた子?間違いないならそこにサインしてとつと出て行きなさい、私は忙しいのよ」

「はい!解りました!」

杖を向けたままなのでふざけるとずどんっ!だなぁと思いつつ、シルカと一緒に差し出された書類にサインしていく。

「詳しい説明はパネリアがしてくれるわ、後で聞いて置きなさい」

「え、学長、なんですそれ。私聞いてないですよ」

「今言ったからね」

「くっ……。この暴君め」

「ありがとっ、最高の褒め言葉だわ」

パネリアさんも屈服するその飄々とした姿に俺は「ああ、この人暴

君だな・・・」と感じていた。

俺とシルカは、パネリアさんに部屋に案内して貰うついでに色々説明されながら歩いていった。

「あなた達には学費の免除の代わりに色々と仕事をして貰うことになるわ。例えば私のように後期になると近隣のモンスター討伐とかになるけど、今のあなた達だと掃除とか修繕とかそのあたりになると思うわ」

「マジか、その程度ならお安い御用だぜ」

「ええ、私もがんばります」

「でも結構大変よ？なんせ学費と寮費は別だから、学費は学費で、寮は寮で仕事を押し付けられるからね。実質負担は二倍」

「何を言っているんですか！！」

これだから貧乏経験したことない人は！

「毎日死にかけていた日々比べれば」

「最初の襲われ続けた恐い日々比べれば」

「正に天国じゃないですか！！！」

「……苦労してたのね」

俺達が2人して涙を流しながら叫ぶと、呆れと悲哀が若干混じった顔でそう言われた。

「今この施設には百人くらい居て、全員寮に入ってるからいざこざ起こしたら即知れ渡るわ」

「結構多いなあ」

「ここは首都にも近いし、学長も先生も優秀な人ばかりだから、態々遠くから来てる奴もいるのよ」

「へえー」

ここ結構凄いな。

「ところであなた達、適正測ったんでしょ。何か教えてよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・えーと、私は魔法使いです」

「あら、私の後輩になるのね。よろしく」

「あ、はい。よろしくお願いします」

「・・・・・・・・」

2人が話している間、俺は今までの態度が打って変ったように静まり返っていた。てかすんげえあさつての方向を向いて「俺に話しかけるな」オーラを放っていた。

「で、あんたは？」

「聞くなよおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

お！！！俺あれじゃん！めっちゃ触れてほしくなさそうにしてたじゃん！何で聞くの！？空気読めないの！？」

「あんたも私の恥ずかしい話聞いたじゃない」

「それはそれ、これはこれです！」

「言い訳しないでとっと喋りなさいよ」

そこまで言われて俺は身体をうち震わせながらも、何とかその忌まわしき単語を口にする。

「・・・・・・・・・・インコンプリテント無能力者」

「は？」

「インコンプリテント無能力者だつつつたんだよ！！ちくしょう！！」

俺の絶叫のそのすぐ後、パネリアさんの大爆笑が響き渡った。

「あ、気にしてたんだ。あ、ごめんなさいっ、すいませ、いたっ、ごめんなさい！……だからあれですよ、簡単なことです。揉めばでかくなる、つまりは俺に揉ませる」

「死になさい」

「ア――――――――――
ッ！？」

股間をおもつきし蹴りあげられた。悲鳴とも絶叫ともつかない鶏の首を締めあげた時のような声が寮の門前にて響き渡る。
俺は必死に、ただひたすら痛みを和らげようと転げまわる。

「無様ね」

パネリアさんは俺をゴミでも見るかのような腐った目で見てそう吐き捨てる。
そんなパネリアさんにオロオロしながらも手を伸ばして自己主張する我が妹。

「あの、パネリアさん。できれば私も、兄と2人がいいです」

「正気なの！？」

まるで本気で家族を心配する時のような表情でシルカの肩を握るパ

ネリアさん、眼がガチ。

「あれよ！？なんの躊躇いもなく親しい女性でもない人にセクハラ発言を働くような変態よ！？」

「あ、それたぶん兄がパネリアさんの事を気に入ったんだと思います。珍しいですよ、こんなに早く兄と仲良くなる人」

「やめてよ！仲良くないわよ！？」

「えー」

「あんたは黙ってなさい！」

はい。

「それでも、たぶんパネリアさんが凄い人だったんだと思います。兄が昨日言っていました、『俺はいつかパネリアさんみたいな冒険者になる』って」

「ちょ、おまつ、それは言っなって言っただろっ！！？」

「いいじゃない、褒め言葉なんだし」

「恥ずかしすぎて俺が死ねるわ」

「……………」

呆気を盗られたといった表情で俺達の会話を聞くパネリアさんは、しばらく俺とシルカとの間に視線を往復させた後、溜息をついてこう言った。

「変な奴ね、あんたもその妹も」

苦笑しながらそう言うパネリアさんに、俺達も少し呆気を盗られるが、やがて顔を見合わせてから同時に言った。

「「兄妹ですから」」

「あ、でも一緒に寝るかどうかの話とは別だからね」

「けちっっっ！！！」

「眠れん（ムクッ）」

結局誤魔化しきれなかった俺とシルカは別々の寮で生活することに

なり、その際の別れの悲壮さと言ったら筆舌し難いものがあつた。
実際は泣き叫ぶ俺をパネリアさんがファイアアローしただけだったが。

それにしても、眠れない。

寝ると苦しいのだ。

寝ると襲ってくるのだ。

寝ると思ひだしてしまうのだ。

だから、いつもシルカの隣りで眠っていた。

あいつが大丈夫、大丈夫っていうから、本当にそんな気がして、いつの間にか眠っていた。

だけど、そんなあいつが今日はいない。

解っていた。これが俺の望んだ結果だ。

俺の目的の為に、俺達の始まりの為に選んだ選択肢だ。

昨日の夜、シルカという話合った。

病気のシルカが冒険者になるのは、やはりやめにしないかと言った。
ノリや目標が出来たことへのテンションの高ぶり、後先考えずに
言ってしまったこともあつたし、どうしても、危険な目に合わせる
ことへの抵抗感があつた。

しかしそれを押しのけて、あいつは言った。

俺に着いていく、と。

それなら、と俺も覚悟を決めた。

なのにどうだ、ただ普通に一睡することすらできない。

俺はどうしようもないほどこの状況に耐えられていなかった。

「どーすっかなあ……」

あいつは、眠れているだろうか。

「心配だな……」

うむ、心配だ。とても心配だ。心配し過ぎて死ぬかもしれん。
……様子
くらい見に行っても怒られないよね？

そうと決まれば即行動。基本後先考えない、それが俺。

俺は一人部屋だがなんとシルカはパネリアさんと相部屋らしい。

ついだが、パネリアさんの様子も観ておくか。

やべえ、テンション上がって来た。

「いくぜ、這いまわるへビの如くっ！」

スニキングミッションスタート
隠密作戦、開始！

第二話 その2（前書き）

戦闘書きたいなあ

第二話 その2

「ふふふ、どんな寝顔なのか楽しいーみじゃないかぁん？ん？ん？ん？ん？」

早速男子寮を音を出さぬように忍び足で出て女子寮へと鼻歌を歌いながら向かう途中。
私は見ました。

「・・・・・・・・何あの要塞」

結構暗視がきくほうの俺は見た、その女子寮のシルエットを。

よく解らない物が突き出し、そして蠢いていた。一瞬侵入を断念しかける程の訳のわからないその様を、俺に恐怖心というより呆氣をとられて見ていた。

正に、なんじゃありや、って感じであつた。

どうするものこうするもない、ここは撤退すべきだ。解らない物には手を出すな、特に食べ物とか。これ貧乏人の鉄則ね。

しかし、しかしだね。

こういつてはなんだが、あれは逆効果だ。

目の前には女の園。そして「やるなよ！絶対やるなよ！」と前振りにしか思えないほどの正直訳分らないレベルで造られた防備。これを前にして男としての反応は二つ。

進むか、進まないかだ。

そして俺はもちろん。

「進む」

「つぶなかつた！マジ危なかつた！！」

何なのあれ！？どんだけここの女の園は恐い防備で固められてるんだよ！

落とし穴の下に酸性のスライムなんて序の口、空気が徐々に抜かれ

て行く個室とか天井と床が同時に迫って行く個室とか矢やら棘の生えた鉄球やらが四方から跳んでくる個室。

どう考えても殺す気満々である。

全部入る前にそこら辺の燈台とか放ってみたら見事に罾が作動し、もれなく全ての家具類はお亡くなりになった。

その様を自分に置き換えてみるとゾツとしない。

ていうかタマタマの肝が冷えた。

「ようやく……ようやく本物の居住部屋……！」

だが俺は辿り着いた。

苦節というには壮絶で、苦行というには稚拙な道程を。

今目的の部屋の前だ。

どうして目的の部屋を探し当てたかって？

おいおい、俺がシルカの臭いを嗅ぎ間違える訳ないだろう？
間違いない、ここにはシルカがいる！

「おじゃましてーす……」

静かに、とても静かにドアノブに手を伸ばし……

ガチャッ。ガチャ、ガチャガチャガチャガチャガチャ。

「閉まってやがる……！」

ここに来てこの当たり前の事実を失念していた。
普通、余程不要な人物でなければ部屋のカギを掛け忘れるなんてことは起こり得ないだろう。
というわけで、蹴り破ろう。

「よーろれえーいつひいーーーーー!!!!!!」

全体重を後方へと向けた時だった。

「部屋の前で何やってのよ」

部屋のドアが開いた。

しかし既に蹴りの勢いはどうしようもない程付いていて、ドアが開いたということはそのドアがあった場所にはパネリアさんがいる訳で。

「おつとごめん」

「げふっ!!」

パネリアさんは粉碎されるはずだったドアの代わりに身体をくの字を曲げて部屋の中に吹き飛んで行った。そのまま仰向けに失神、結

構本気で鳩尾に入っちゃったからしばらく起きないと思われる。
やべえー……………どうしよう。

とりあえず……………、中に入って考えよう。

俺は部屋の中に入り込み、静かにドアを閉めたのだった。

「うつ……………あ……………」

「っ……………」

パネリアさんが起きた。

後ろめたさから、バツと座っていた椅子の裏に反射的に隠れてしま

う。

「あ・・・私は？ここは・・・」

「お、起きました？」

「！？」

「ちょちょちょつ、俺だつて俺！」

俺の声に反応したパネリアさんは、いきなり複数個のファイアアロ
ーを展開させたので慌てて隠れていた椅子から飛び出して姿を曝す。

「ああ、あんたね・・・。。。。。。っ！？なんであんたが
いるのよ！？」

「あー・・・それには海千山千ふかい理由がありまして」

「嘘ついたら火矢でハリネズミにするわよ？」

「やっぱり一人じゃ眠れなかったのでシル力求めて海千山千」

「あの防衛機能を越えてきたにしては随分な理由よね」

「いやー、黙つといてね？ほんと」

「・・・ま、聞きたいこともあったのよね」

そう言つて大量のファイアアローを消し去るパネリアさん。聞いた
ことが無かつたらもしかして火達磨だったのだろうか？・・・・・・
ありえる。

「そこに座つて」

「あ、はい」

パネリアさんは二段ベッドの下に腰掛け、俺は備えつけてあつた机
の椅子に座る。

「じゃ、聞くけどさ」

「う、うくり・・・」

結構緊張しながらパネリアさんの詰問を拝聴する。

「なんであの子はあんなに泣いていたの？」

「な・・・に・・・？」

俺はその瞬間頭が一気に冷えた。

第二話 その3

始めは誰を指して泣いていたと言ったのか解らなかった。
だが答えは当然としてそこにあり、俺はたぶん気付かないふりをしていたのだろう。

俺に対してパネリアさんが『あの子』と称するのは一人しかいないだろう。

「・・・・・・・・」

ベッドの方を見る。

そこには今までずっと見てきたいつも通りの寝顔で眠る我が妹、シルカ。

彼女が、泣いていた。

少なくともそんな姿、あの日以来見ていなかった。いや、それ以外で見たことがない。

その妹が、泣いていた？

サバサバしている印象を受けるパネリアさんが、こんなにも顔を顰めて妹の事を聞いてきたのだ。たぶん大分泣かれたのだろう、よく見ればその胸元の服には涙の跡がたつぷりと湿っていた。

今度はベッドを覗きこんだ、彼女の顔を良く見るために。寝顔はいつも通りだ。そう、こびり付いた涙の跡以外は。

呆然と、また備えつけの机の椅子に腰かける。

パネリアさんはジッと俺の行動を見ていた。

俺は二回程深呼吸をして心を落ち着けた後、視線を床に落としながら喋り始めた。

喋るといっく独白に近かった。

「知らなかった・・・」

「・・・」

「そうか・・・泣いていたのか・・・そうか・・・」

どうも、俺は参っているようだった。

ぺらぺら話すという訳ではないが、聞いてほしい、聞かせたいという弱みが心の底から滲みでてきた。

どうしようもなく、ぶちまけてしまいたいのだ。

「俺は、そう、そうだ。いつも俺が泣いてて、そいつが慰めてくれた。俺は、それで眠れてた」

「・・・そう」

言ってることは支離滅裂だったと思う。

順序も感情も前後不覚でうまく口にした言葉が出てこなかったが、それでもパネリアさんは時々相槌を入れながら辛抱強く俺の話を聞いてくれた。

「知らなかったんだ、俺は、ずっと支えられてきたのに、泣くなんて、シルカが泣くなんて思いもしなかったんだ。兄なのに、こいつの兄貴なのに、ずっと、寄りかかって来た分、守って行こうと思っていたのに」

顔を手で覆い隠し、俺は酷く自分を恥じていた。

情けない、愚かしい、女々しい、怠慢だ、傲慢だ、陳腐だ。

「そんな風に、俺は思っていただけで、俺は……！」

「……仕方ないわね」

「……えっ？」

そっと、やさしく抱きしめられた。

「デカイなりの癖に子供みたいね、あんた」

「十五つすから……」

「そうだったの。それじゃあ、仕方ないよね。まだ子供だもんね」

そう言って、パネリアさんは俺の頭をその胸にかき抱くようにしながら撫でた。

優しい手つき、どこか懐かしい香り、向けられる情愛、それらに戸

惑いながらも、反発する気持ちは不思議と起こらない。

「よく頑張ったわね。お兄ちゃんだもんね、よく頑張ったわ。ご褒美に、寝るまで一緒に寝てあげる」

「何すかそれ・・・何すか、それ・・・」

馬鹿にするな、と言いたかった。

だけど、思い出すのはあの光景と、あの時の自分。

その姿は確かに無様で、確かに醜悪だった。

あの時、シル力を一度置き去りにして逃げ出した自分。

それが俺の悪夢で、今でもその心を蝕み、恐怖させる出来事。

その悪夢が、今はほんの少しだけ和らいでいた。

「私は十七なのよ、お姉さんなの。年下の子が、恐くて眠れないなんて悲しい事、見てられないじゃない？」

「・・・そうっすか」

「だから私にドーンと任せて、今は眠りなさい」

そう言っただけでベッドに誘導され、大人しくそれに従う俺。ベッドに入り込むとパネリアさんが歌を、歌い始めた。

「彼は探すでしょう 亡くなった人を求めて
彼は探すでしょう 残してきた人を求めて」

それは悲しい詩だった。
それは綺麗な詩だった。

「彼は見つけたのか？ いいえ、見限られたのです
彼は見つけたのか？ さあ？ 孤独なのでは？」

．．．．．過去を追う男と．．．．．変わっていく世界の物語．．
．．．．．
．．．．．ああ．．．いやだなあ．．．男は報われないのだろうか．．
．．？

「さあ、時よ 全てを置き去りにして あなたは攫っていくのですね
ああ、時よ せめて一時ばかりの慈悲すら あなたは攫って行く
のですね」

．．．．．男は探し続けた．．．．．自分と自分の過去を．．．
けどそんな時すら過ぎ去って．．．．．
．．．．．そんな結末は嫌だな．．．．．そんなことを思いながら．．
．。

歌が導くように、俺は眠りに落ちて行った。

「おやすみなさい。．．．彼のようにはならなくてもいいのよ?」

最後に、そう聞こえた。

第二話 その3（後書き）

詩の部分は適当です

第三話 「起きぬけの模擬テスト」

「すげえ、ここが食堂か・・・広いな・・・」

「そりゃ百人も収容するんだもの、広いわよ」

「あ、兄さん！パンがあるよ！」

「マジで！？確保しろ確保！！」

何とも黒歴史に認定されそうなのはんずかすいー夜が明けて、俺達は寮内の食堂に来ていた。

寮は全部で三つの建物で構成されていて、まず男女の生活の場である男女寮、そして食事や大浴場などの施設を備えた中央寮がある。男女寮の間に中央寮があり、三つの建物が一つになっているのだ。

そんな中央寮の食堂だが、貧乏人の観点から言わせてもらえば、『一体いくら金をつぎ込んだんだ？』と思う程の料理にそれらが並ぶテーブル、これだけでもすげえの一言だ。

なんせパンがある、大量に。一日に一つ食えるか食えないかの瀬戸際の貧乏人からしたら考えられない量だ。

正に至福とも呼べる空間が、目の前に広がっているのだ。

これは堪能するしかあるまい。

「ふつ、我ながら恐ろしい・・・。いきなりパンを三つも取ってやったぜ！！」↑バターロールみたいな小さいパンの乗ったトレイを大きく掲げる十五歳男子

「兄さん、私このちょ、ちょこれと？のついたパンを取って来たよ
！」↑これまた嬉しそうに小さいパンが一つ乗ったトレイを持ち
上げる十四歳女子

「……」↑無言で湧き上がってくる哀しみに耐える十七歳女子

さて、早速席に着いて頂くか……？

何故か片手で顔を覆ってるパネリアさんの皿の上の物体。

ま、まさかこれは……！

「パネリアさん、こ、これは……？」

「……？ああ、若鳥の胸肉のグリルね」

「っ！！？」

「っ！！？」

ガタタツ、と椅子を押しのかけてその場で頭を下げる俺とシルカ、そ
して突然の行動に困惑するパネリアさん。

「お願いです！ちょっとだけでもいいんで妹に恵んでやってくださ
い！」

「お願いです！ちょっとだけでもいいんで兄に恵んでやってくださ

い！」

「ええ!？」

「ちょ、ばかお前。俺の事はいんだよ、育ち盛りの癖に遠慮すんなよ」

「私は、いつも兄さんの後ろで守ってばかりだから、食事くらい兄さんに楽しんでほしいの」

「お、お前……」

くっ、俺には過ぎた妹だぜ……。

「ていうか、普通にバイキング制なんだから取ってくればいいじゃないの……」

「ッ!？」

「ッ!？」

「いや、『ッ!？』じゃなくて……。あんたらどれだけ贅沢に馴れてないのよ」

そんなこんなでようやく食事を無事に始める事ができたのだった。

「ふう・・・食った食った」

「兄さん、食べすぎだよ」

「あんだね、この後冒険者になる為に授業があつて、その中には当然運動も入ってるのよ？そんなので大丈夫なの？」

「心配ない心配ない」

「不安ねえ・・・」

結局俺達は授業の始まるギリギリまで食事続けた、主に俺が。

だってあんなうまいんだもの！そら残さず食べなきゃばちが当たるでしょうが！

貧乏な肉体労働派社会人諸君、一言言わせてくれ。

てめえはその不味い飯を一人で不味い不味い言いながら食ってなざまあああああああああああああああああああ！！！！

「ねえねえ、教室ってどんなの？すごいよねえすごいの？」

「静かにしなさいよ、てかなんでそんなテンション高いのよ」

「え、朝だから？」

「訳が分からない・・・」

「正確には男の生理現象・・・」

「それ以上いったらファイアアローね」

「うつす」

やばい、無駄にテンション上がってるわ。

やっぱおいしい料理食べたからかな？めっさうまかったもんな食堂の料理。

うん、今日の俺のテンションおかしいっ！

「まったく・・・、ほら、そこが教室よ」

「蹴り破つていい？」

「普通に開けなさい」

じゃあ普通に、全力で開ける。

「ふんっ!!」

一度は開くドア、そして脚を踏み入れる俺、そして勢いを殺しきれず反動で戻ってくるドア、挟まれる俺。
沈黙に包まれる教室。

俺は何とか激痛を我慢して教室に入り、フラフラとした足取りで教卓に寄りかかった。

教師らしき年配の男性が心配そうに手を貸そうとするが、俺はそれを制して教卓に寄りかかったままこう言った。

「クインスです……」

この後俺が教室の片隅で変な奴扱いを受けたことは想像に難くないだろう。

第三話 その2

授業は『基礎体力』、『知識』、『職業別講座』の三つに分かれている。

『基礎体力』はその名の通り冒険者は身体が資本だ、その身体の使用方を学ぶ。

『知識』は冒険者として役に立つ知識を、地理、モンスター生物、職業の事など様々だ。

『職業別講座』は職業ごとに分かれる能力の使い方を学ぶ。アビリティ

この三つの授業から一つ自由に選んで一日かけてそれらの教えを請い、学ぶのだ。

三か月かけてこれらの中から自分にあつた授業を選択することで、冒険者としての方向性が決まってくる。

曰く、体力バカか、頭でっかちか、専門家か、そして冒険者か。

俺には『知識』は合わない。頭がよろしくないからな、机上の教鞭が俺の頭に刺激してくれるとは思えない。

『職業別講座』、こいつも論外だ。インコンプリテント無能力者の教師とか……俺だっってお断りだわ。つか何を学んだよ。

つまりは自然と学ぶ要素は一つに絞られてくる訳だ。

そう、俺は『基礎体力』を選択した。

で、今、

「君……何者だい？あの冷徹なる火矢と一緒に食事をするなんて」

なんかからまれてる訳だが。

「……………」

「だんまりとは、いささか失礼じゃないかな？ああ、僕の名前はライル、ライル・ベルネボブ・ケル・ファール。剣士ソートマンの資質を持つてる」

数人のお付きの手下を従えた綺麗綺麗な容姿を持った男が名乗って来た。

こいつ多分貴族だよなあ、何か名前も無駄に長いし。なんで話しかけてきたんだろ？意図が読めない上に気障な笑い方が不快だ。

あ、でも名乗ってるから、こっちも名乗らなきゃダメか、礼儀だし。

「クインス、ただのクインスだ」

「クインス君か。さて、君に改めて聞きたい。どうやって彼女に近づいた？」

「ん？あー……あれだ、畑荒らしたモンスターと闘やりあつてたら、あいつがモンスターの頭を俺の目の前で吹き飛ばしてな。それが縁で……思えば知り合ってまだ3日だな」

「……相変わらず野蛮な女だ」

「全くだ、毎回俺の一張羅を燃やそうとする」

なんとなーく俺とこいつとの認識の差異に気付いたが、争い事は面倒で得にならないと理解する程度の頭はあったので取りあえず話に合わせた。

すまん、パネリアさん。街に出た時なんか奢るわ。

「ははは、なんだ。始め食堂で見た時は仲良さそうだったが、僕の勘違いだったようだね。どうだい？君も僕のギルドに来ないか？」

「ギルドに？」

ギルドには二つの種類がある。

気の知れた仲間たちと共に集まる旅団ギルドと、それらをまとめて大きな形で運営する組織ギルドだ。

この場合、目の前の坊ちゃんが言っているのは旅団ギルドの方だろう。

こいつのギルドねえ……。

気分的に言えば、ない。

この人を見下した態度が気に入らないし、何より後ろに控えている手下も気の合いそうな気質はいないだろう。

一緒にいて楽しいかと言えば間違いなくノーだ。

しかしギルドに所属するというのはメリットにもなる。

報酬を分けあうことになるが、安全に依頼クエストを達成しやすくなる。

この養成施設が存在するのも、早いうちにギルドを作ったり所属したりするコネを創るためであつたりもするのだ。

自分で創るギルドは、それこそ一からの創設となる。軌道に乗るのも時間がかかるし手間もかかる。

逆に既にあるギルドに所属するのは手間もかからないし色々都合もいい。仲間関係を築くのに苦労したりもするが。

色々あるが、総合的に言うと。

「すまんが答えはノーだ」

「・・・何？」

「お前さんのギルドに入る気はない」

「・・・そうか、なら彼女とギルドでも創るのかい？」

「それもいいかもしれんな」

おめーとよりはな。

これで話しは終わりだ。

そう思ってそいつらから背を向けた時だった。

背後からの声、明らかな嘲笑を含んだ声。

「あの阿婆擦れに仲間なんて出来やしないさ、精々奴隷として利用されるか、性奴隷として利用されるか見ものだね」

あー・・・ちょっと無理だわ。

「おい、クソガキ」

「何かな？冷徹なる火矢の性奴隷君」

「俺は頭が悪い。おとろしく悪い。だけど解るぞ、ここは殴ってもいい場面だ」

「できるのならね」

向こうは坊ちゃん合わせて五人でこちらは一人、どうも不利だ。喧嘩なら確実に避けるべき状況。だけど避けるには恐怖と愚かさが必要。足りない。

だからこそ、俺は囲まれたのにも関わらず、落ち着いてクソ共相対する。

やるだけやるさ、後の事は・・・それこそ後から考える。

緊張が最高に達し、そのまま乱闘になると思われた時だった。

「貴様ら、何をやっている！」

「ちっ、運が良かったね」

「ちょ、待て。俺もこれじゃあ納得できねえよ」

「それではどうする？教官の目に止まってしまった今、喧嘩はど法度だぞ？」

「んなもん簡単だろ、倫理的かつ合法的にできる喧嘩と言えば決まってる」

「・・・・・・・・・・正気か？君が僕に勝てるんでも？」

「当たり前ーだろ、坊ちゃん」

「ゲスが、いいだろう、その案のつてやる」

「決闘だっ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9526y/>

冒険の準備はいいか？

2011年12月3日13時47分発行